

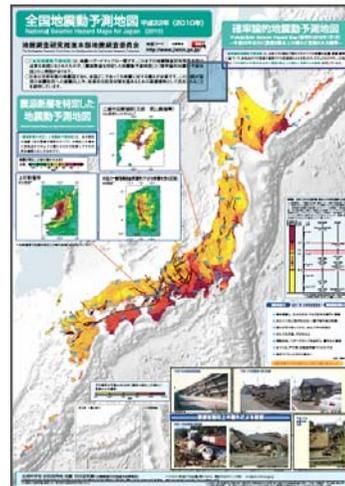
- 平成21年(2009年)以降、毎年「全国地震動予測地図」を公表してきたが、東北地方太平洋沖地震発生を契機に指摘された課題(過小評価等)を受けて公表を見送り。
- 現在、地震調査委員会において課題の解決に向けて検討を行っている。

(参考)これまでの公表方法

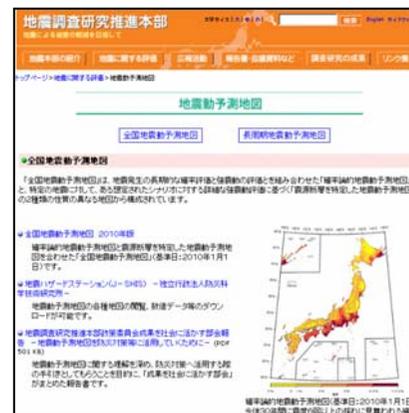
- ・ **ウェブページ** (地震調査研究推進本部、J-SHIS)
- ・ **報告書の冊子**
- ・ **ポスター・パンフレット** (全国の地方自治体等に配布)



パンフレット



ポスター

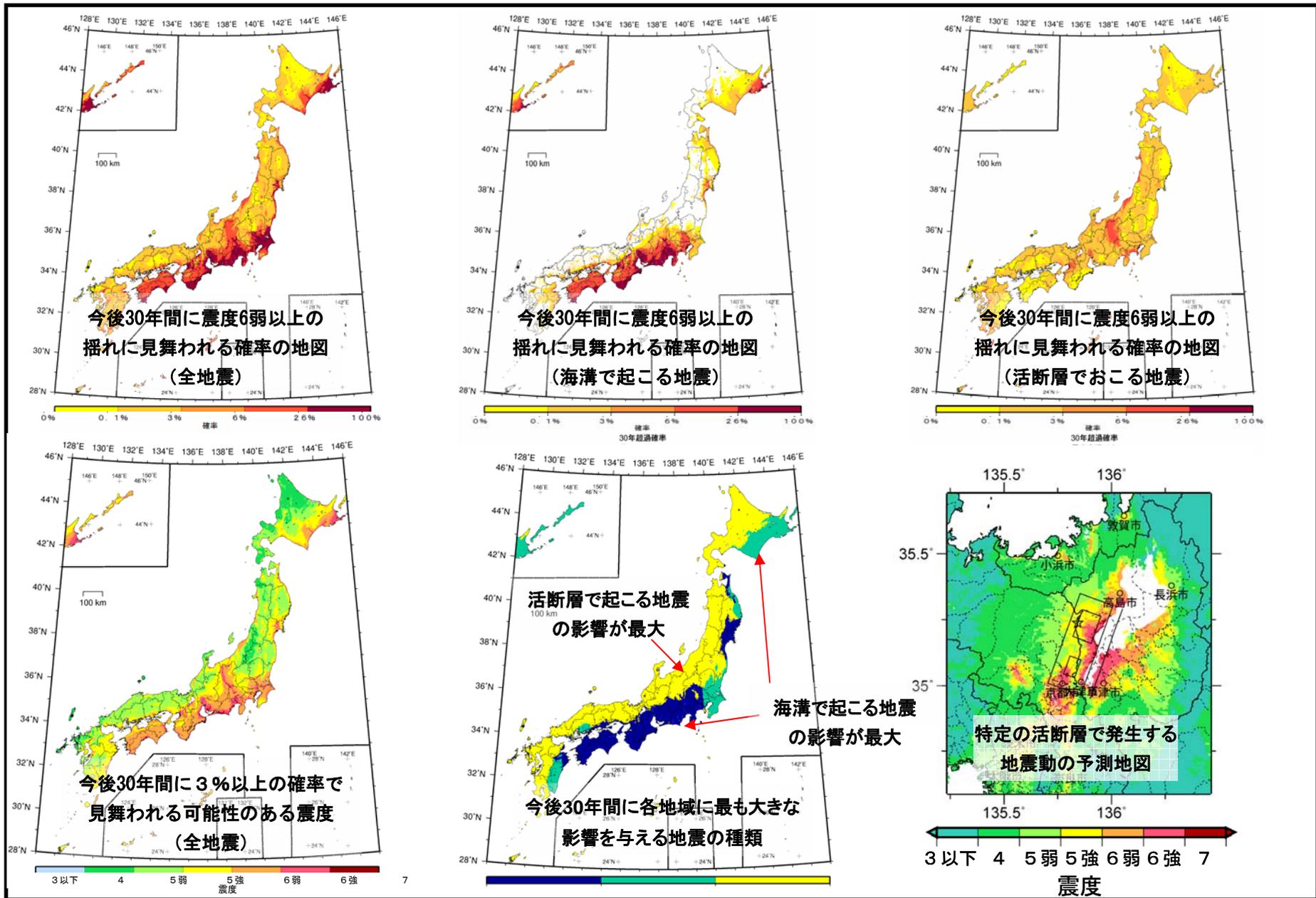


ウェブページ(地震調査研究推進本部)



ウェブページ(J-SHIS)

これまで作成してきた地震動予測地図の例



地震動予測地図の課題

◇**確率が低い地域では地震が起きないという誤解を招いていないか。**

- 「確率が低い地域も安全ではないこと」、「数%という確率が小さいこと」を伝えるには？
- 誤解を少なくするため、既往最大の地図も同時に示してみてもどうかという意見もあるがどうか。

◇**専門家ではない一般国民にとって確率は分かりにくいのでは？**

- 分かり易く伝えるためにどのような内容をどのように示すべきか？
- 現在は1つの地震動予測地図を公表しているが、専門家(地方自治体等の防災担当者向け)向けの地図と一般向けの地図とで分け、一般向けの地図では平易な表現や解説を豊富にするなどしてはどうか？

◇**地図には科学的限界や不確実性が常に伴うことを伝えるためには？**

- 活断層が特定できない等の多くの課題がある中で作成した、科学的限界や不確実性が伴う地図であることを伝えるにはどうしたら良いか？

◇**発生間隔が大きく異なる海溝型地震と活断層の地震のハザードをどう表現するか？**

- 海溝型地震と活断層の地震のハザードを同時に表現する地図について、発生間隔が比較的長い活断層の地震ハザードの色は海溝型地震と比べて薄くなる傾向にあるが、安全情報になるおそれはないか？
- 上記を解決するため、設定期間を長くして地図に表現する方法(例えば、数千年程度)もあるが、防災意識の低下につながらないか？